

特集 レタスビッグベイン病対策

レタスビッグベイン病対策

全国有数のレタス産地である本県淡路島では、20年以上にわたってビッグベイン病が発生し、生産上の大きな阻害要因となっている。現在まで薬剤処理、土壌消毒、耐病性品種などの防除技術が開発されて、発生程度は軽くなっている。さらに長年にわたる発生動向調査結果をふまえ、新たな

本病の圃場診断技術、土壌pH制御による軽減効果、耐病性品種の利用に関して、最新の内容を紹介し、新たな診断・防除技術として普及を図る。

神頭 武嗣（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2447）

レタスビッグベイン病の近年の発生動向

レタスビッグベイン病は、1994年頃に発生し、その後拡大して、三原平野全域に及んでいる。近年は、発病圃場率が約30～35%の間で推移しているが、その発生程度は軽症化の傾向にある。

内容

本県におけるレタスビッグベイン病の初発生は、1994年頃に南あわじ市（旧南淡町）で確認された。発生当初は、限られた地域のみでの発生であったが、年々発病地域が広がっていき、JAあわじ島管内全域に及んでいる。

1997年よりJAあわじ島が主体となって毎年、発病の最も著しい厳寒期に、全筆調査を実施してきた。その結果を図に示した。

発病圃場率は1997年から2004年頃まで右肩あがりで上昇し、年々増加傾向であった。しかし、2004年以降は、平均の発病圃場率は約30～35%の間で推移している。また、2002年以降は、発病程度別に調査を行っているが、2002年～2006年頃までは、発病株率が25%以上の多～甚発生圃場が約半数を占めていたが、2007年以降は、発病株率が25%以下の微～少発生圃場が増加してきた。これは耐病性品種の利用、マルチ畝内消毒及び定植時薬剤灌注処理などの防除対策が開発され、現地に普及していったことによるものと推察される。

今後の方針

JAあわじ島、南淡路農業改良普及センター等関係機関と協力して、今後も発生動向を注視する。

岩本 豊（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

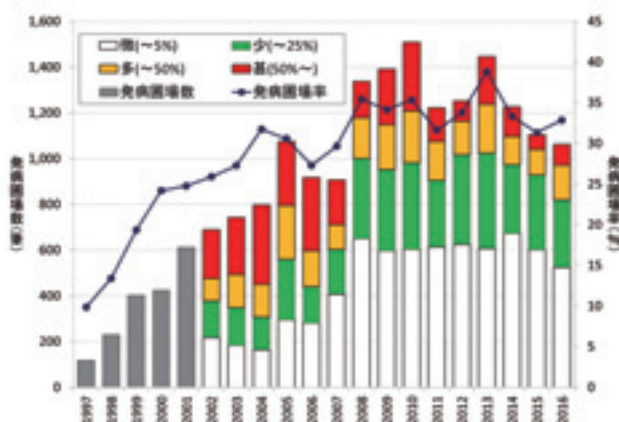


図 レタスビッグベイン病の発生動向
(JAあわじ島調べ)